

高齢化社会と子ども

原 ひろ子

高齢化社会とは、ご承知のように、人口のピラミッドがピラミッドでなくなつて、だんだん釣鐘状に、さらにはマッシュルーム型と申しましょうか、下のほうが少なくなつていく社会のことです。近年出生率が減少していることについては、特に人材供給という視点から「女たちよ、産みなさい」という論調が随分できて、新聞やTVの番組等でご承知のことと思います。また、幼稚園の先生や保母さんの定員が各自治体でどうなるか、この

学会にご参加の皆様にとつても生活の問題に関わるようなことも、しばしば話題になってきています。そういう意味では、高齢化社会は、大人の側からみて不都合なことが多いように思われます。しかし、これを子どもの側からみたときにどういふことになるだろうか、ということについて今日はお話ししてみたいと思います。

ひとつは国家予算の在り方なんですけれど、私には、国の予算をはじめ、地方自治体の予算や民間のお金など

が、子どもに向かってどういうふうに割り当てられているのか、三歳児以下、就学前、小学生、中学生、十八歳未満とどんなふうにお金が出ていっているのか、考える必要があるなあと思っています。

しかし、残念ながら計算する技術をもっていません。

現在女性の問題にどういう計算が成り立つかにつきましては、「社会政策におけるジェンダー・バイヤス」、即ち男にとつての社会政策と女にとつての社会政策がどういうふうになるのか、試算中の方がいらっしゃって、大変複雑で時間がかかるものだそうです。子どもにつきましても申し上げるまでもなく、文部省でとりまです教員算や自治体に私たちが納める税金、民間の財団や私立の幼稚園の経費など、どれくらいのお金が子どものために動いているのか、こういうのを合わせないと、厚生省が保育所にいくらお金をを出しているのか知るだけではダメだと思ふんです。その辺のところを計算するには、私だけの力ではちょっとできないので、どなたか専門の方、すでに計算していらっしゃる方がいらっしゃいましたら、

ぜひ教えてください。

私どもの国は法治国家であつて、どうしても法律の体系のなかでいろいろ動いておりますし、それプラス財政が単年度決済の形で運営されております以上、どういふことが行われているのか、保育に関わる人は少しドライなことにならざる必要があるなあという気がいたします。

先程の「ジェンダー・バイヤス」についてなんですけど、例えば、日本では福祉をきめる法律や税制などを決める審議会のメンバーやもとの法律をつくる官僚の方々は、ほとんど男性で、たまに女性もいらっしゃる程度です。もっとも最近では国際婦人年などございまして、二十年前のなんと三倍、三%になるなど、めざましい変化を遂げていますが、それでも世界全体でみると何十何番目、OECD諸国では最低の女性参加率なんです。

また、教育の審議会に現場の体験のある方が選ばれる

こともございますが、任命された当初は画期的だとかなんとかいて、新聞に写真付で紹介されたりしますが、審議会で実際に発言する機会にめぐまれないのが実情のようです。

このことは、大人と子どもになると、女と男よりもっと不利で、女は飾りでも審議会に出られますけど、子どもは飾りにもなっていない。そういうなかで、大人は子どもの都合というのを考えた在り方というのを、子どもになりかわって考えたつもりになっているというところなんです。大人と子どものこうした関係を「何バイヤス」と呼ばばいいでしょうか、保育の専門の先生でしたら、いい言葉を思い浮かべなされるのではないのでしょうか。

さて、高齢化社会における子どもの問題を考えると、都市中心部における子どもの過疎と農山漁村の子どもの過疎、このふたつが当面の課題に入ってくると思います。

そのときどういう工夫をするか。例えばお年寄りがお集まりになる場所と子ども達が集う場所を近くにしたり、一緒の建物にして、お年寄りから長年の知恵を受け取り、子ども達の元氣をお年寄りにあげるといった試みをしている自治体や町内会があることは、私が申し上げるまでもないことだと思います。

ただしこの場合も、うんと小さいお子さんならいいけれど、学童クラブなんかと一緒にするのは御免こうむりたいと言われたりする。高齢化社会になるにつれて、子どもイコール危険、うるさい、汚いといったような見方もでてくるわけです。保育園の先生方も近隣とお付き合いにはご苦労なさっていることと思います。子どもが騒音公害のもととして見られると、子どもを持つていらっしゃる方は、「産めよ、育てよ」と言われながらも、一方で身近な体験のなかで近所にうんと気配りをしてあげなければならない状況が、施設や親の立場からでてくるわけです。

これは、密集していない地域で生活していない方には

実感はおありにならないかもしれませんが、密集している地域でお暮らしの方にとっては、子どもは迷惑とみられ、家探しも楽じゃないんです。老人の転居の問題も、地価高騰のなかで深刻ですが、子どものことを考えると同時にお年寄りのことも考える、子どものことだけでなく老人や、それから保育学会の精神でいくと障害者の問題、つまり弱者とよばれる人達のこととあわせて考えることが大事だなあと 생각합니다。

高齢化社会と子どもを考えていくときに、非常に大切なのは、「母性」とか、大日向さんの言葉で言えば「育児性」の中身は何なのか（大日向雅美『母性の研究』川島書店 一九八八、『母性』新曜社 一九八八）、子どもが育つとき子どもを育てるとき、どういう条件がそろえば育つと思うのか、というコンセンサスを家庭なり、地域社会なり、幼稚園や保育園、医者と患者である私達の間で、どういうふうにつけていくかだと思います。価値の多様化と申しましょうか、そのところが一人一人の心の中でもいろいろな問いが出てきて、それを今もみ

あっている段階らしい。なかでも、いわゆる子を産んだ母親だけにはなく、「母性」という概念を今日どう位置付けることができるか考えたいと思っています。大日向さんは、「母性」から「育児性」へと提唱していらっしやいますが、それに対して私は、「次世代育成力」という概念から考えることにした理由をここでお話しいたします。（原ひろこ 館かおる編『母性から次世代育成力へ 生み育てる社会のために』新曜社 一九九二）

生物学という親、即ち精子と卵子の持ち主だった個人を親とするならば、高齢化社会では親だけが子どもを育てるといふ発想をちょっと切り替えて、産んだ人も産まない人も子どもを育てるといふ発想が大切なのではないでしょうか。生物としての母親であるかないかを離れて、「社会のなかで育つ子ども」をどう考えるか、ということなんです。「社会のなかで育つ子ども」というと、往々にして文部省の健全育成の発想でいくと、地域の子ども会活動を盛んにして補助金を出しましょうとなる。もちろん、そういう活動はないよりはあったほう

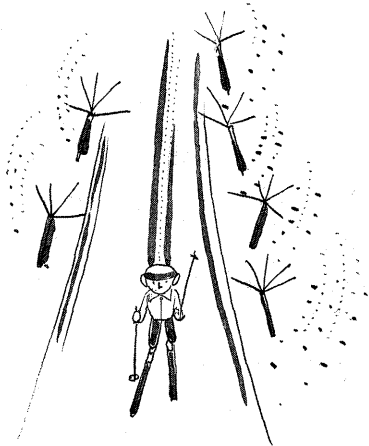
がいい、とても大切なことですが、そういう発想だけではダメなんです。もっと社会政策全体のなかで、都市計画ないしは地域の空間的デザインが、保育の立場からみてどうなのか。◎県◎郡◎町に育つ子どもからみて、子どもが走り回りやすい状況は何か、どのくらい足を鍛えるといいか考えていくことが、必要ではないでしょうか。

今日の保育学会のプログラムをみせていただいていると、保育者として私は何ができるか、保育者と親とのつながりはどうするか、親は子どもをどうみているのだろうか、といった発表はたくさんあったように思われます。と同時に、「家族・地域・親子」というセッションで地域をテーマにしたものが少なかったのは、興味深いだけ深刻だなあと思いました。もちろん、地域に関する研究を進展させていくのは大変で、評論家のエッセイ程度ならすぐできるでしょうけれど……。

先程もいきましたけれど、特定の地域だけでなく、国家とか財政とかマクロなレベルでの子どもの位置付けに

対する研究がうかがえるとうれしいなあという気がします。

それと同時に、特定の幼稚園、保育所においてだけ



なく、もっと広げて今の社会のなかで子どもを育てていくことを考えるネットワークを保育関係者だけでなく、市会議員さんら行政サイドや商店街の人達、開業医のお医者さまなどとつくっていくことも大切ではないでしょうか。そういう形で、子どもが遊ぶ空間、移動する状況をどうやって具体的に充実していくか、こういう実践はすでになされているのかもしれませんが、大事なのではないのでしょうか。

私は近年、山形県の朝日連峰の方で調査をしているわけですが、そこでおもしろかったのは、「東京の人はよく歩きますね」と言われたんです。「ちょっとそこまです歩いていきます」と言うと、「いえいえ車でどうぞ」と勧められる。どうも東京よりも子どもがモーターゼーションに浸っていると申しましようか、モーターゼーションにさらされている度合いが大きいために、子どもが歩かなくなっているようなんです。

例えば、過疎になってきて三十戸しかない集落がございます。その小学校は、全校生徒十七人しかいないんだ

けれど、過疎になることの悲しみが託されているんじゃないか、地域をでていった人、住んでいる人からの寄付で立派な校舎が建っちゃったんです。全共闘世代の人達からは考えられないくらい、いい設備がそろって、まるで天国のような小学校なんです。が、そのたった一人の一年生が遊びに行こうと思ったら、友達を探さなくちゃいけない。いずれ中学で一緒になれるかどうかわからないにしても、遠い集落に住んでいる子ども達と友達になれるように、いくつかの集落が合同でサッカー大会や運動会、お祭りなどをして、一生懸命取り計らっているわけなんです。それでお友達はできるわけなんですけど、そうなると親心から、子ども同士で遊ぶ時間ができるだけ長くしてやろう、充実して遊べるようにと、車で送り迎えしてやるわけなんです。昔は自転車ですべて通っていたそうですが、今では山道はビュッと凄いスピードで車が行き来して、かえって危ない。この種のことをどうするか、つまり大人のモーターゼーションに依存しない、子ども達が自由に動ける場所をどう作る

か、が問題なんです。

十年ほど前のOECDの会議で日本のスピーカーが、「原っぱの喪失」を唱えて外国の人たちに印象を与えたことがございました。けれども今や、「原っぱを取り戻す」というより「子ども道をどうやって取り戻す」キャンペーンをしなくちゃいけない。移動するのでも大人のモータリゼーションに依存するのではなく、また生活時間も大人に管理されるのではなく、子ども達のペースで行ったり来たりできる、つまり活動に関する管理されない状況をつくっておいて遠くから大人が見守る工夫ができませんいものでしょうか。

つまり、保育する場合に子どもとどう関わるか、親としてどうしつけるかについては考えられやすいですけれども、どういうふうにしないでいるか、負の関わり、負の発想を高齢化社会の子どもを考えると、うんと意識しないといけないのではないのでしょうか。特に日本人は、やることにおいて意味があると思うようですので、することに於いて自己確認をし、自分のやっていること

を評価する。若い人のなかには体得していらっしやる方もいるようですが、しないことに意味を見いだして、それについて自己評価し、自己点検したりすることが、なかなか習慣になっていない。けれども、しないことのためにどういってお金を使うかなんて、子どもにとってすごく大切なことではないかと思えます。

例えば、自動車に乗せてあげないとすると、子ども道を作らなきゃいけない。随分お金がかかることで、これを自治体に納得してもらうためには、住民側がオーガナイズし、大変な時間をかけなきゃいけない。

こうした物理的なこと以外にも、高齢化社会になるほど世代間の考え方のちがいをどうやって折り合いをつけていくか。たかましい人はなんとかこなしていくでしょうが、そうでない人が抱えている悩み、自分の親と自分との子育ての考え方にズレを感じて、人間関係の調整を学習中の若い母親などへのサービスを行わなくてはならない。子どもを育てやすい社会状況を作るには、今の対処療法的政策を乗り越えて、私たち生活している側、現

場で関わっている側が、何らかの形で工夫を積み重ね、試みをふやしていくことが大切だと思います。

高齢化社会であるからこそ、異世代でのコミュニケーションをどのくらい丁寧に行っているか、考えていきたい。それと同時に、従来日本の活動が常識としてきた、「あの人は子どもがいらないから、ちょっとね」「離婚したらダメ人間」といった人間にたいするレッテルの張り方をやはり変えて、一緒に子どもすること、それからお年寄りのことを考えていくべきなんです。例えば、自分は若くして両親を亡くして孤児として頑張ってきた、だから親のない子として差別して白い目で見えてきた人達が親の面倒をみるのは当たり前だ、親がずっといたから勉強もできて、大学まで行っちゃったりしたんだから、というような、あなたと私のちがいを越えて、みんなでお年寄りとお子どもの面倒をみていこう、助け合っていこう。

多様な育て方、人生の歩み方、若い方、死に方を、などと云うのはやさしいけれど実際はね、とお思いでしょ

う。けれども、身近なところでの工夫が随分といろいろなところでされているようです。地域社会で工夫されている情報を取り入れ、互いに交換したりするといいいのではないのでしょうか。私達のようにしゃかりきに働くよう育てられた人間は、「しなくてもいい」知恵をもっている若い人達から学ばせていただければと思います。

(お茶の水女子大学女性文化研究センター)

※ この原稿は、昨年五月、日本保育学会第45回大会の講演録音をもとにまとめました。(編集部)